



一九二五年の南京路 上海市档案館蔵

開港のひざば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

編集・発行/横浜開港資料館 (財)横浜開港資料普及協会
横浜市中区日本大通3番地 TEL 231 電話(045)201-2100
発行日/平成5年10月30日
印刷/株式会社 平井印刷所

「横浜と上海との比較都市形成史」共同研究

学術交流五か年をふり返つて

始まりは六年前、一九八七年(昭和六二)年の夏だった。この年七月、当時の当館企画調査室長阿部征寛、横浜市立大学加藤祐三・群馬大学西垣晴次両教授が、海路上海に渡り、上海市人民政府外事弁公室、上海図書館、上海社会科学院歴史研究所を訪問した。目的は、横浜関係史料の所在調査とその収集の可能性を探ること、上海の都市史研究の現状を把握すること、研究交流の方法を探ることの三つ。当館では、幕末の安政条約以来、横浜と深い関係を持つことになるアメリカ、イギリス、フランス等に所在する関係史料の調査に着手しており、今回の中国行くもので、海外史料調査の一環であった。殊に、横浜と上海とは、一九世紀半ば開港を共通の歴史的契機として、その後の歴史と都市形成を大きく進めた開港都市であり、横浜の歴史を世界及び東アジア史全体の中で捉えるために、国内の類似都市と共に上海との比較研究が課題の俎上にのぼっていた。

帰国後、この上海の史料調査と都市比較研究を支援するため、横浜上海都市形成史研究会(代表加藤祐三)が組織された。翌八八年一二月に加藤代表を团长とする調査団が再び上海市を訪問、今後の学術交流について話し合った結果、双方の関係機関による共同研究を行うことで合意した。そして、翌八九年度から、この比較都市形成史に関する共同研究が、横浜・上海友好交流事業の一つに位置づけられ、五か年の共同研究計画が開始されたのである。同年蟹澤光三元館長を团长とする代表団が上海市を正式訪問し、翌九〇年は林徳輝上海市档案館副館長を团长に代表団が横浜市を訪問した。こうして毎年交互に代表団を派遣、関係史料の調査や交換、現地踏査を行い、研究討議を重ねた。交流には、横浜側から当館と横浜上海都市形成史研究会が、上海側から上海市档案館、上海市社会科学院歴史研究所、上海市歴史博物館、及び上海横浜都市史比較研究会の複数の機関

と都市比較研究を行なうことで、横浜上海都市形成史研究会(代表加藤祐三)が組織された。翌八八年一二月に加藤代表を团长とする調査団が再び上海市を訪問、今後の学術交流について話し合った結果、双方の関係機関による共同研究を行うことで合意した。そして、翌八九年度から、この比較都市形成史に関する共同研究が、横浜・上海友好交流事業の一つに位置づけられ、五か年の共同研究計画が開始されたのである。同年蟹澤光三元館長を团长とする代表団が上海市を正式訪問し、翌九〇年は林徳輝上海市档案館副館長を团长に代表団が横浜市を訪問した。こうして毎年交互に代表団を派遣、関係史料の調査や交換、現地踏査を行い、研究討議を重ねた。交流には、横浜側から当館と横浜上海都市形成史研究会が、上海側から上海市档案館、上海市社会科学院歴史研究所、上海市歴史博物館、及び上海横浜都市史比較研究会の複数の機関

と研究会が参加した。また上海図書館は、研究計画に直接には参加せず、上海マーキュリー、匯報、彙報など貴重な資料を提供して研究を支援し、交流全体の調整には横浜市総務局国際室と上海市人民政府外事弁公室があたった。交流を積み重ねるなかで双方は、両市の比較都市形成に関する記念展示会の開催、共同学術論文集の刊行で五か年の成果を公表することに合意し、この目標に向って研究交流は一段と真剣なものになつた。今回の記念展示会、及び現在編集中の共同論文集は、全く共同研究の賜である。記念展示は、企画内容について素直な意見を交換し、展示品の選択を含め互いの智恵を出し合い練り上げたものだ。論文集の編集は共同編集委員会が行い、論文内容や叙述・注記の方法まで忌憚ない意見をたたかわせた。交流の中では意見や見解の違い、時には厳しいやり取りもあったが、それは互いの歴史的文化背景の相違によるもので、真摯な討議を重ねるなかで相互理解を一層深めねるものとなつた。交流の成果は、展示会や論文集だけではない。この七年間の上海の人びとの交流の中で培った相互の信頼と理解こそ、最大の成果なのだと、いま感じている。(佐藤孝)

特別展示

「横浜と上海———の開港都市の近代」展

展示資料から

るにいたる工部局の出発点をしるした貴重な記録である。

一八九九年租界拡張地図

今回の展示会には、上海側の主催機関である上海市档案館と上海市歴史博物館より、多くの貴重な資料が出品されている。それらは今回初めて中国国外で公開されるものばかりである。ここではそうちた出陳資料の中から、四点を選んで紹介したい。

工部局第一回参事会議事録

図1は上海イギリス租界工部局第一回参事会議事録である。工部局 (Municipal Council) は、イギリス租界（のち共同租界）の行政組織で、一八四六年に設置された道路碼頭委員会を基礎として、一八五四年七月一日に設立された。この日、外国人居留民の納税者会議は工部局の設立と七人の工部局参事（理事）の選出を行なった。

今回、上海市档案館より出陳された資料は、七月一日の納税者会議によつて設立をみたばかりの工部局参事が、同月一七日に開いた第一回会議の議事録の複写である。会議には議長のウイリアム・ケイ (William Kay)、メドハースト (W. H. Medhurst, ローラン宣教師牧師)、カニンガム (E. Cunningham, 駐上海アメリカ副領事) ら七人の参事が出席した。そして、会議は四人の参事の出席により開会され

ること、会議は議長の要請で毎月開くこと、また三人の参事の要請があれば臨時会議が開催されること、そのほか、工部局の会計年度、小委員会の設立等について協議を行なつた。

Municipal Council が中国語で「工部局」と翻訳されたのは、中国の官僚とおり、租界の建設行政を担当する官庁が工部であったことによる。また、工部局の前身の道路碼頭委員会の名が示すとおり、租界の建設・整備を主目的としていたことにも起因する。しかし、工部局の管轄範囲は建設行政にとどまらず、法務・財務・衛生など租界行政全般において、その中には警察行政も含まれていた。第一回参事会議事録は、以後制度を確立し、強力な権力を有す

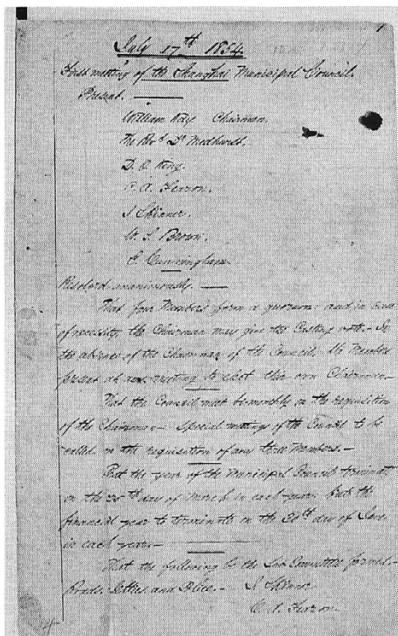


図1 工部局参事会第1回議事録
上海市档案館蔵

年、上海では英米租界が大拡張され、正式に共同租界と改称された。図2は清朝政府と共同租界当局の双方が、新たに拡張された範囲を確認して署名・捺印した地図である。地図の中央上には「大清國南洋大臣特委上海推廣公共租界」として、兩江總督劉坤一 (Special Deputies of H. E. Viceroy Liu) により任命派遣された上海知県王豫照、上海道台余聯沅、南洋公学校長ファガソン (J. C. Ferguson, 中国語名は福開森) の名が記され、余とファガソンが署名している。また、その右には共同租界代表として、参事会議長 F. アンダーソンが署名し、工部局の印がおされていいる。左上の英語と右上の中国語とともに、この地図は、一八九九年六月二〇日（光緒二十五年五月一三日）に開かれた納税者特別会議で可決された新訂上海共同租界土地章程第一条に適用される地図であり、兩江總督劉坤一と上海知県と参事会議長の署名をえたものであると記している。英文では一八九九年一〇月と記されているが、中国語では年月日の記入がない。なお、地図の左下に作成者の署名と一八九九年一〇月の日付が手書きされている。

一八四五年にイギリス租界が設定されて以来、租界は數度にわたり拡張された。イギリス租界は一八四六年の第一回拡張、一八四八年の第二回拡張と続き、面積は約二平方キロメートルとなつた。一方、虹口の一角にアメリカ人宣教師が住みはじめ、事实上のアメリカ租界が形成された。一八六三年六月正式にアメリカ租界が成立し、同年

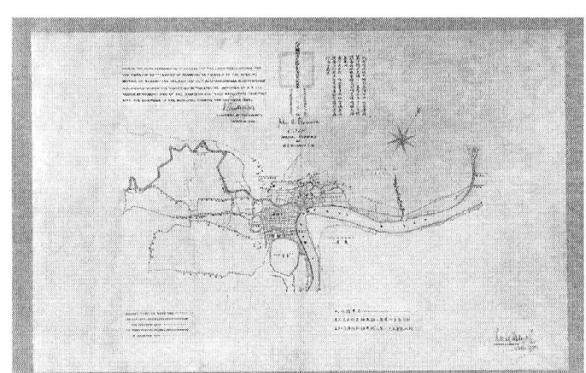


図2 1899年租界拡張地図 上海市歴史博物館蔵

九月にはイギリス租界と合併した。一八九三年にアメリカ租界部分が拡張され、その後も中国人人口の増加、外国人による工場建設などの理由により、租界拡張は引き続き要求された。

一八九七年九月、参事会は租界拡張案を提示、翌年二月上海領事団首席スチューベルト・ディッジ総領事は上海道台蔡鈞と租界拡張交渉を開始した。しかし、上海道台は事実上租界外にも外国人は居住しており、人口の多寡と租界面積の大小は関係なく、現状が最適であるとして拡張要求を一蹴した。また中国側には拡張範囲内に宝山県が含まれていることへの根強い反対があつた。さらにフランス租界側の共同租界拡張への反対も加わり、交渉は難航した。

一八九九年三月、北京の英米独の三国公使は総理衙門に兩江總督劉坤一に租界拡張の要求を認めるよう訓令を出すことを迫った。一方、上海工部局は劉坤一と懇意であった南洋公学校長ファガソンを南京に派遣し、劉との折衝にあたらせたが、ファガソンは逆に劉坤一によつて中国側代表に任命され交渉を進めることになった。その結果、同年五月に拡張協定が成立し、納稅者会議は六月二〇日の特別会議で新境界に関する共同租界土地章程第一条の修正案を可決した。図2の一枚の地図には、こうした長年にわたる租界拡張の経緯が凝縮されている。この拡張によって租界は約三倍に拡大され、二・六平方キロメートルとなつた。

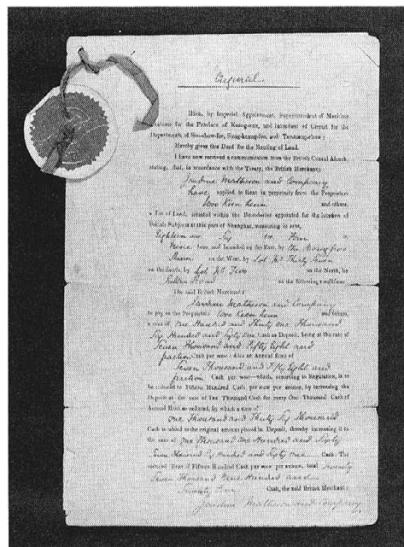


図3 ジャーディン・マセソン商会地券
上海市歴史博物館蔵

ジャーディン・マセソン商会地券に関する共同租界土地章程第一條の修正案を可決した。図2の一枚の地図には、こうした長年にわたる租界拡張の経緯が凝縮されている。この拡張によって租界は約三倍に拡大され、二・六平方キロメートルとなつた。

一九二一年時点で、茂新と福新あわせての小麦粉生産高は全中国的二三パーセントを占め、榮兄弟は「小麦粉王」と称された。

高は飛躍的に伸びた。一九二一年時点では、茂新と福新あわせての小麦粉生産高は全中国的二三パーセントを占め、榮兄弟は「小麦粉王」と称された。

上海福新麵粉公司の第一工場は一九一二年一月に四万元の資金を集め、アメリカ製の機械を導入して創設された。翌年夏に生産を開始し、日産一二〇〇袋の小麦粉を生産した。福新はその後一九二六年までの十五年間に工場を八つに増やし、生産なく使用された。おもに華北・東北地方で販売された。特に安東(現、丹東市)でよく売れ、付近の農村では主人が綠寶星の小麦粉を買ってこないと婦から叱られるほどの人気商品であった。

天津一帯で販売された。粉が粗く、よく膨らむため、粉食を中心とする北方の人々に人気があった。今回の展示では、このほかに六つの福新の商標が陳される。

なお、ここで紹介した「一八九九年租界拡張地図」、「福新麵粉公司商標」など、上海市档案館、上海市歴史博物館所蔵の原資料の展示は、一〇月三〇日から一一月二八日までで、それ以後は複写の展示となる。

(伊藤景美)

ジャーディン・マセソン商会の地券

図3は一八四七年のジャーディン・

マセソン商会の英文版の地券(複写)である。上海租界での外国人の土地貸借の方法は、簡単に述べると次の通りである。まず、土地を借りたい外国人が中国人地主と直接交渉し、交渉がまとまるとき外国人は必要書類を揃えて管轄の領事へ土地貸借の申請をする。領事は上海道台へ照会し、上海道台が地券を三通発行する。領事はその地券に捺印し、借地人に渡す。三通の地券は一通は道台が、一通は領事が、一通は借地人本人が保管する。

図3の地券では、監督江南海關分巡蘇松太兵備道(上海道台)が英國領事オールコックの照会を受けて、ジャーディン・マセソン商会に、同商会が劉坤一と懇意であった南洋公学校長劉坤一と懇意であつた南洋公学校長ファガソンを南京に派遣し、劉との折衝にあたらせたが、ファガソンは逆に劉坤一によつて中国側代表に任命され交渉を進めることになった。その結果、同年五月に拡張協定が成立し、納稅者会議は六月二〇日の特別会議で新境界に関する共同租界土地章程第一條の修正案を可決した。図2の一枚の地図には、こうした長年にわたる租界拡張の経緯が凝縮されている。この拡張によって租界は約三倍に拡大され、二・六平方キロメートルとなつた。

上海福新麵粉公司の創始者榮宗敬、榮德生の兄弟は、中国屈指の企業家である。江蘇省無錫の出身で、一九〇〇年頃から、無錫・上海で製粉業・紡績業への投資を始めた。そして一九〇五年五月のアメリカ製品ボイコット運動に始まる外貨排斥運動が高まりを見せる中、一九一〇年代の初頭に、茂新麵粉公司、福新麵粉公司、申新紡績工場を創設した。その後、第一次大戦中の民族工業勃興の追い風を受け、榮家企業グループは急速な発展をとげていく。

上海福新麵粉公司の第一工場は一九一二年一月に四万元の資金を集め、アメリカ製の機械を導入して創設された。翌年夏に生産を開始し、日産一二〇〇袋の小麦粉を生産した。福新はその後一九二六年までの十五年間に工場を八つに増やし、生産なく使用された。おもに華北・東北地方で販売された。特に安東(現、丹東市)でよく売れ、付近の農村では主人が綠寶星の小麦粉を買ってこないと婦から叱られるほどの人気商品であった。



図4 福新麵粉公司商標 上海市档案館蔵

地、つまり黄浦江と蘇州河に挟まれた一番地で、広さは一・二ヘクタールあまりであつた。

上海福新麵粉公司の小麦粉の商標

上海福新麵粉公司の創始者榮宗敬、

榮德生の兄弟は、中国屈指の企業家である。江蘇省無錫の出身で、一九〇〇年頃から、無錫・上海で製粉業・紡績業への投資を始めた。そして一九〇五年五月のアメリカ製品ボイコット運動に始まる外貨排斥運動が高まりを見せる中、一九一〇年代の初頭に、茂新麵粉公司、福新麵粉公司、申新紡績工場を創設した。その後、第一次大戦中の民族工業勃興の追い風を受け、榮家企業グループは急速な発展をとげていく。

上海福新麵粉公司の第一工場は一九一二年一月に四万元の資金を集め、アメリカ製の機械を導入して創設された。翌年夏に生産を開始し、日産一二〇〇袋の小麦粉を生産した。福新はその後一九二六年までの十五年間に工場を八つに増やし、生産なく使用された。おもに華北・東北地方で販売された。特に安東(現、丹東市)でよく売れ、付近の農村では主人が綠寶星の小麦粉を買ってこないと婦から叱られるほどの人気商品であった。

天津一帯で販売された。粉が粗く、よく膨らむため、粉食を中心とする北方の人々に人気があった。今回の展示では、このほかに六つの福新の商標が陳される。

なお、ここで紹介した「一八九九年租界拡張地図」、「福新麵粉公司商標」など、上海市档案館、上海市歴史博物館所蔵の原資料の展示は、一〇月三〇日から一一月二八日までで、それ以後は複写の展示となる。

(伊藤景美)

横浜新風土記稿 (22)

横浜大同学校

横浜大同学校は、横浜で初めて設立された中国人子弟の教育機関である。同校の歩みは横浜華僑社会全体の盛衰と関わる。ここでは、開校から震災後の復興にいたるまでの横浜大同学校の歴史を概観したい。

創立の経緯

学校設立の動きは、一八九五年の孫文来日に始まる。孫文の革命思想の影響を受け、横浜華僑の馮鏡如と馮紫珊らが中心となり、一八九七年頃、学校設立の気運が盛り上がり、革命組織である興中会によつて中西学校が設立された。しかし、まもなく康有為・梁啓超らが保皇派に傾斜し、また校長に保皇派の徐勤が就任するにおよんで、校名を大同学校と改めた。一八九八年のことである。

そして翌年の三月一八日、居留地一四〇番地で、正式な開校式が挙行された。校長には新たに大養毅が就任した。当日、梁啓超はじめ、中華会館董事孔雲生・譚玉階、大同学校理事鄭餘初・林北泉の横浜華僑の有力者数百人が大同学校に集まつた。そして大隈重信はじめ、東京専門学校の高田早苗・柏原

文太郎、東亜同文会の中西正樹、また平山周、宮崎寅藏、浅田徳則・神奈川県知事、美沢進・横浜商業学校校長、大谷嘉兵衛・横浜商業会議所会頭らを来賓に迎えて、開校式が盛大に催された。(『清議報』第十冊、光緒二十五年一月二日、『横浜貿易新報』明治三二年三月一九日)。

大同学校の開校は、横浜華僑にとっても、それに協力した日本人側にとっても、教育問題それだけに止まらないかった。この年八月の居留地撤廃を前に、横浜華僑側は地元をはじめ広く日本社会との経済的・政治的関係を強めようとする方向にあった。一方、日本政財界にとっての大同学校は「日本提携」を推進する人材の養成機関としての意味を持ち、中国進出策の一環とも捉えられるものであった。それは以下の大隈の「余が大同学校に關係せしは自ら対清意見を実行するの端緒とも基礎ともならんことを思ひてなり。豈に他意あらんや。近來清國の朝野挙げて我国に寄重するの風ある。宜しく此好機を逸せず其の子弟を陶冶し其の後進を馴養し以て清國革新の氣運を促せんと欲するに在るのみ。」(『東亜時論』第九号、明治三二年四月)といつ

た言葉にも表れている。

初期の状況

こうした複雑な背景を持つて開校した大同学校であつたが、設立当初の様子を当時の英字新聞の記事から見てみよう。まず、校舎はレンガ造り二階建てで、一階には大きな教室が二つあり、二階には教職員室があつた。設備は日本

の学校はおろかイギリスの学校より立派であると評されている。生徒は六歳から十三歳までの一四〇人で、そのうち三〇人くらいが女子であった。生徒はわずかな上海人のぞけば、ほとんどが広東人であった。毎日、午前八時から十二時まで、四人の教師が生徒達を教えた。また、午後には六十人の成人クラスがあり、一人の教師が英語・算術、地理、文法などを教えた。

一八九九年の段階では、生徒数は男女合計一一〇人であったが、一九〇五年六年頃では一八〇人前後に増加した。○七年だけは理由は判明しないが、男子生徒数が二倍となつたため生徒数四五〇人に昇り、その後〇八年、一九年は二六〇人あまりとなつていて、この間、横浜華僑全体の人口は一八九九年の三〇〇三人から、一九〇五年の五三三四人へと増加し、一九〇九年には六二八〇人とピークに達した。生徒数はその後はほぼ二五〇人前後を維持している。なお、表にした約五年の間では、男子生徒よりも女子生徒の増加が著しい。また年により生徒数の変動があるが、一九一一年より入学者数の統計がとられている。一九一〇年代前半では、毎年ほぼ四〇人前後が入学し、二〇〇人から三〇〇人が卒業していた。大同学校は、革命著述家の馮自由、詩人の蘇曼殊などの逸材を世に送り出し

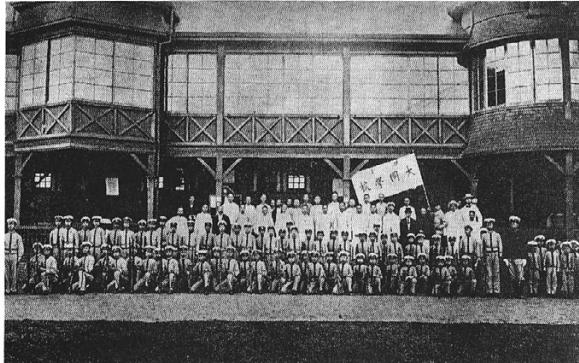


図1 横浜大同学校兵式体操団
『新民叢報』第九号より(1902年、国立国会図書館蔵)

大同学校の発展

『神奈川県統計書』の「学事」(明治四年から「教育」)には、公立私立の学校一覧があり、その明治三二年度から大正一〇年度までに、大同学校が掲載されている。大正四年度までの主な項目を一覧したのが別表である。ここから大同学校の発展の様子を見てみよう。

『神奈川県統計書』の「学事」(明治四年から「教育」)には、公立私立の学校一覧があり、その明治三二年度から大正一〇年度までに、大同学校が掲載されている。大正四年度までの主な項目を一覧したのが別表である。ここから大同学校の発展の様子を見てみよう。

『神奈川県統計書』の「学事」(明治四年から「教育」)には、公立私立の学校一覧があり、その明治三二年度から大正一〇年度までに、大同学校が掲載されている。大正四年度までの主な項目を一覧したのが別表である。ここから大同学校の発展の様子を見てみよう。

表：横浜大同学校生徒数その他一覧

(人)	生徒数	横浜在住 中国人口	卒業者数	入学者数	教員数
(年)	総数	男	女	男	女
明治32(1899)	110	70	40	—	—
明治33(1900)	136	110	26	—	6
明治34(1901)	294	272	22	—	8
明治35(1902)	133	101	32	4,780	2
明治37(1904)	178	131	48	5,127	1
明治38(1905)	179	134	45	5,334	1
明治39(1906)	190	131	59	5,748	2
明治40(1907)	450	381	69	5,944	4
明治41(1908)	262	191	71	6,109	3
明治42(1909)	262	191	71	6,280	1
明治43(1910)	240	160	80	6,217	5
明治44(1911)	237	127	110	4,236	4
明治45(1912)	276	173	103	4,532	8
大正2(1913)	218	127	91	4,780	16
大正3(1914)	272	171	101	4,090	19
大正4(1915)	236	144	92	3,887	16
				12	4

典拠：『横浜在住中国人口』は1899年が『神奈川県史』資料編15、1901年から1925年は『横浜市統計書』。それ以外の項目は『神奈川県統計書』各年版。

大同学校参観記

『貿易新報』明治三九年三月八日号と九日号に、大同学校の参観記が掲載されている。若干長くなるが、当時の学校の様子を彷彿させる文章であるので、その一部を紹介したい。

教室は何れも二階にて階下は幼稚園なり、教室内には長き卓子長き椅子ありて卓子にはベンさしとインキ壺と行儀正しく列べられ、四壁には丈余の掛物に大字もて教訓的の語を記したるが幾つともなく懸れり、一教室には十三四才位の男生徒に向ひて浮かれ胡弓の講義をなしつつあり、其次の室にては日本人の教師蠟燭と石油とに就ての講義中なりし、それより一室隔たりたる處に女生の教室あり戸を開きて入るや否や女生の全體は一同起立して礼をなし、受持教師は藩書院女史にて生徒は今や熱心に編物の稽古中なり、……

一八九八年の状況と較べて、建物の使い方に違いがあるが、それは恐らく一九〇四年に幼稚園が創立されたためであろう。幼稚園の保育年限は二年、クラスは一、参観記が書かれた当時の児童数は男児二十五人、女児二三人で、五歳には二〇人あまりを数えた。日本教員は一、三人であった。

なお、創立年は大正五年版と大正六年版が明治三一年（一八九八）になつた年を創立年としている。

大同学校はその後も発展を続け、一九一一年三月一〇日、創立十五周年の記念祝典を盛大に催した。当日、中華会館で行われた祝宴には、康有為と梁啟超が須磨よりかけつけ、また駐横浜清国總領事劉崇潔、清國公使館書記官王氏はじめ、二百人あまりの横浜華僑が列席した。また、日本側からは荒川義太郎横浜市長、大谷嘉兵衛横浜商業會議所会頭、警察署長、市内各公共機関の代表が招待された。宴席では、大同学校校長吳廷奎、康有為、梁啟超が演説し、同校の隆盛を祝した（『横浜貿易新報』明治四四年九月一二日号）。

関東大震災後の再建

一九二三年九月一日の関東大震災で横浜は壊滅的な打撃をうけ、横浜華僑社会も甚大な被害を蒙った。

震災当時、横浜には大同学校、志成学校、華僑学校、中華学校の四つの中國子弟の教育機関があり、合計七四二名が就学していたが、震災で各校とも鳥有に帰した。

震災後、復興とともに横浜へ戻つてくる中国人が増え、教育機関の設置が急務となつた。そこで孔雲生、黃焯民、鄭省三らの横浜華僑の有力者が、外務省へ学校再建のための補助金交付を申請した。

一九二五年三月二〇日、外務大臣幣原喜重郎より、中國人の教育機関私立

大同学校校舎の再建費として、二万五千円の寄付金交付が許可された。その後、大同学校、華僑学校、中華学校と三校が合併し、名称を中華公立学校と改めた。そして、一九二六年一〇月一六日、山下町一四一番地で、中華公立学校の落成式が挙行された（『横浜貿易新報』大正一五年一〇月一六日号）。

以上、創立から震災後の再建までの大同学校の歩みを概観した。創立時の状況とその後の経過、再建への熱意を見るに、大同学校は単なる教育機関にとどまらず、横浜華僑社会の一つの重要な柱であったことがわかる。また、早くから成人教育、幼児教育を行なっていたことからも、横浜華僑が如何に教育を重視していたかが思われる。

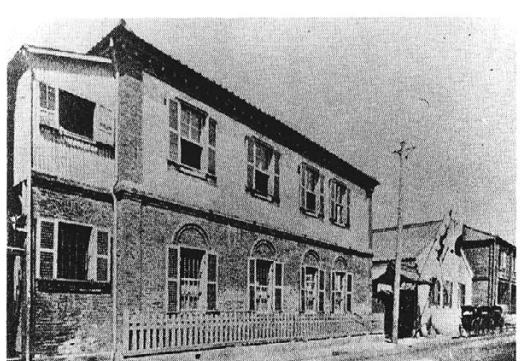


図2 大同学校正面図
『曼殊大師傳補遺』(1975年) より

慶応の大火とイギリス軍

一八六六年十一月二六日の朝九時頃に末広町から出火し、折からの強風にあおられ、関内地区の大部分を焼け野原とした大火はよく知られている。C.ワーグマンが本国の週刊紙『絵入りロンドン・ニュース』(一八六七年二月九日号)に寄稿した大火のもようを伝えるイラストは、当時の貴重な資料として、大火をあつかつた展示や本でたびたび紹介されてきた(挿画)。絵の中奥に消火活動に向う一団がみえるが、当時横浜に駐屯していた兵士の一



大火時の本町通り

リス第九連隊第一大隊、砲兵隊と工兵隊、フランスの海兵隊が駐屯していた。しかし「史料でたどる明治維新期の横浜英仏駐屯軍」(横浜開港資料館編、一九九三年)編集の際、この『絵入りロンドン・ニュース』とは異なる記述のある資料が確認されたので、それを紹介することとした。

大火後の十一月一日付の二新聞、「ジャパン・ヘラルド・メイル・サマリー」、マーケット・リポート・アンド・プライス・カレント」と「ジャパン・タイムズ・オーバーランド・メイリル」に大火の詳細なもようが記された。これらの新聞はともに駐日イギリス公使オールcockから本国外務省宛報告の付属資料として残っていたものである(F.O.46/72)。新聞では駐屯軍のうち、第九連隊第二大隊の兵士と、横浜港に停泊していたイギリス艦隊の水兵らが取り上げられている。

前者の新聞によると、「第九連隊のノックス大佐は「消防活動の」陣頭指揮をとった。午前十一時頃までは兵士は任務に服しよく働いた。しかしこの時までにわずかの節操のある立派な例外者を除き、すでに多くの兵士は酒を飲む方法をみつけ、ほとんど理性を失うほど酔っ払っていた。自分たちの兵士、水兵、市民らが力をあわせて消火活動にあたつたが火はまたたく間に広まつていったとワーグマンは記している。当時、横浜には中国から移駐してきていたノックス大佐率いるイギ

とは不可能であつたので、目の届かないところに行くやいなや、嘆かわしいことに、かれらのもつとも邪悪な感情がたちまちのうちに露呈したのである。ある紳士は、自分の倉庫が火に包まれたので隣接の商館に入つてみると、食堂で家財道具を移す手伝いによされた数名の兵士が、勝手にワインをあけているのを見つけたので、拳銃を抜いてかれらを家から追い出した。多くの兵士がただ略奪目的で侵入してきた。ある兵士が、任務を忠実に遂行している歩哨に向つて、ちょっとの間だけ目をつむついてくれれば、あとで山分けしてやるから、と言つていたという話をきいた。またある兵士が同僚に、ここで一番の商館はどこか知っているかと尋ねたという話もある。質問者の意図をはつきりと暴露している質問である。

後者の新聞は次のように書いている。「しかし、もしわれわれが第九連隊の兵士と艦隊の水兵が恥も外聞もないほどの行動をとつたという事実を伏せてしまつたとしたら、われわれは公衆にたいする義務を大いに欠くことになるだろう。横浜ばかりでなく、イギリスや、われわれの陸海軍の軍隊が大切に思われているあらゆる所に住む公衆にたいして。月曜十一月二六日」の午後から火曜の夕方までの間中、公平な観察者の目から見て、ずっと街が襲撃されかつ武装した群衆に強奪された状態にあつたとは言い難い。最初のなかつたに違いない。(中武香奈美)

かれらの士官の指揮下にあつた。しかし、いくつかの貯蔵室が開けられ、とにかく本町通りのボイド氏の酒店の内部が焼かれた後は、士官とともに行動していたわずかの立派な兵士を除き、多くの兵士が酒を飲む姿が見られた。そして第九連隊の兵士と艦隊の水兵が火灾と同様、外国人居留地の危険な敵と化すおそれが生じた。兵士のあいだに、酩酊状態での見張りや任務の放棄といったもつとも凶悪な犯罪がおこなわれているのを見かけたのは、一度や二度ではなかつた。プリニセス・ロイヤル号の水兵がある商人の商館に入り込み、かなりの高額の財産が入つた金庫を盗んだという完全に証拠のある場合もあつた。その商人は水兵を追つて軍艦まで行き、金庫を探そうとしたが、つまみ出され、口汚くののしられ、暴力で脅され、また軍艦の士官も水兵の側に立つていてまつたく助けてくれなかつた。

消防活動にあたつていた駐屯軍兵士と艦隊の水兵らがしだいに略奪者と化していくようですが、記されている。第九連隊第二大隊は居留民の保護といふ名目で駐屯し、かつ日頃から軍楽隊が演奏会を開いたり、競馬やレガッタに参加するなどして居留民との交流を深めていた。また艦隊乗組員も軍艦内や街の劇場で演劇を催すなどしていた。兵士らがとつた普段とあまりに違う大際の行動は、居留民にとって驚きと恐怖以外のなにものでもなかつたに違いない。(中武香奈美)

横浜人物小誌

震災を記録した写真家

岡本三郎

34

大正一二(一九二三年)九月一日の関東大震災による横浜の被害状況を記録した写真類は、刊本に収録されたものや絵葉書を含めて数多く遺されてはいるが、地震直後、すなわち火災発生以前の被災状態を撮影した写真となると極めて少ない。その唯一といつてよい写真が、『横浜市復興会誌』や『横浜復興録』などにも収録されている、常盤町二丁目から港町一丁目横浜市役所方面を撮ったもので、岡本写真館主岡本三郎の撮影によるものとされている。この岡本三郎なる写真師については、大正一〇年発行の『最近横浜市商工案内』に記載がなく、大正一五年版に「真砂町三ノ四二横浜写真通信社 岡本三郎」の記載を見いだしえたが、その素姓を明らかにすることはできなかつた。



岡本三郎

『関東大震災と横浜』展のオープニング間に、鎌倉在住の石橋大司(久保山墓地に自費で「関東大震災殉難朝鮮人慰靈之碑」を建立し供養を続けておられる)氏から、件の「常盤町二丁目付近」と同画像で「大正一二年九月一日正午 岡本三郎」のサイン入り、すなわちオリジナルプリント版の寄贈を受けることができ、急拠『横浜市復興会誌』からの複写写真にさしかえ展示す

ることとなつた。これが新聞報道され

るや、父親が岡本三郎と懇意であった

という本牧在住の中村豊(父君の中村

廣一氏は吉浜町の石炭商で横浜石炭同

業組合の有力員)氏が来館され、岡本

写真館の現像焼付になる震災関係写真

の提供と、岡本三郎の遺族に関する情

報を提供してくださつた。早速、岡本

三郎三女の鳥山和子氏(磯子区在住)

と、次いで長女の岡本すみ子氏(伊勢

原市在住)と連絡をとることができ、

岡本家を継いだ岡本滋・すみ子御夫妻

より「常盤町二丁目付近」のガラス乾

板を含む多量の写真資料の提供を受け

るとともに、岡本三郎の略歴について

御教示をいただいた次第である。以下、

御夫妻のまとめられた「略年譜」によつ

て岡本三郎の略歴を紹介してみよう。

岡本三郎戸籍上は三朗一は、旧姓薬袋(みない)明治三〇(一八九七)年七月一八日薬袋宗治郎・さとの三男

として山梨県西八代郡大塚村に生まれる。明治四二(一九〇九)年、一三才にして横浜写真界の古参・玉村康三郎に入門する。時恰も横浜開港五十年祭の年、「自分は六十三才まで生きていれば開港百年祭に市民として列し得ることを決意する。大正一二年四月、横浜の写真師西村賀萬三の五女ラクと結婚、常盤町二丁目二〇番地(現二丁目一〇番地)に写真館を開業。「ミナイ」ではまずかろうと、写真館名を「サブロの写真工場」とする。同年六月、鶴見の岡本だけと養子縁組し岡本姓となる。常盤町二丁目付近の震災写真は、この「サブロの写真工場」上から撮つたものであろう。「工場」前から馬車道方面を写したものも焼失前の震災状況を示す証拠写真として貴重である。

余燼くすぶる九月二一日の状況を記録したものも多い。これらは『横浜市復興会誌』に収録されている他、少なくとも二種の絵葉書になつてゐる。

震災後は真砂町に移り、三丁目四二番地(区画整理以降は三丁目二八番地)に「岡本写真館」を再興するとともに「横浜写真通信社」を構える。昭和初期は、「スタジオ撮影の傍ら紅葉坂の紅葉閣、伊勢山皇大神宮の結婚式場撮影の一手引き受け、又市役所、県庁、税關等の記録写真を受注し、報道写真の分野では横浜貿易新報等に横浜市、横浜港を中心とするニュース写真を提供するなど多忙ながら生涯で最も充実した

時期であった」とされる。昭和四(一九二九)年四月、フォード自動車による旅客用単葉飛行機の売込みに際し、宣伝用写真六百枚を撮影したもの、代金未払いのため立川飛行場で旅客機を差押封印したことは当時の新聞に大きく報じられた。絶頂期を物語るエピソードになろう。また、昭和一五(一九四〇)年満州国皇帝が横浜に上陸した際や、昭和一七年新港埠頭におけるドイツ巡洋艦爆発事故の記録にあたつたのも岡本三郎である。戦後も、昭和二年に跡継ぎと期待した長男の一平を事故で喪つた失意のなか、一二才の決意通り、横浜の戦災復興を記録しつづけた。現横浜市役所庁舎の新築工事を撮影したものが最後のまとまつた仕事になろうか。昭和三三(一九五七)年三月一五日から昭和三四年九月九日に至るガラス乾板七八枚が遺されている。

岡本三郎が写真界に身を投じた時期、横浜写真の世界は、外国人向土産用を中心とする着色写真の時代は過ぎ、着色絵葉書の全盛期にあたつており、新聞に写真が掲載されるようになつた時期でもあつた。岡本三郎は、ポスト絵葉書をニュース写真に見定め、「横浜写真通信社」を興すとともに、松屋デパートの商品カタログ用写真を手がけるなど商業写真の分野をも開拓することによつて、横浜写真の伝統を継承・転進せしめたといつてよいであろう。平成二年六月二六日九三才にて天寿を全うした。戒名「長春院壽山道景居士」。合掌。

(堀勇良)



▼展示

(1) 横浜上海友好都市提携20周年記念
『横浜と上海』 10/30~2/4 上

市との関係機関と協力し、開港以後一歩みを貿易、文化等から紹介する。

▼講演会等

(2) 『横浜の近代農村』(仮題) 2/11
~4月下旬 大正期以降の横浜の農村問題を多角的に紹介する。

『横浜と上海』展記念講演会

11/11
「上海租界と横浜居留地」 加藤祐

三 「疫病と都市」 飯島涉 受講料五

○○円 募集人数八〇人

○○円 募集人数八〇人

*会場 いずれも横浜開港資料館講堂
館あて

(1) 彩色刷り物「和蘭陀船之図」、「新興の横浜」ほか 八点(神奈川区六角橋加山昇市氏)

(2) 関東大震災関係新聞 二八〇点(港北区錦ヶ丘 今井清一氏)

(3) 書籍『浅野統一郎』ほか 四点(千葉県柏市)

▼寄贈資料

(1) 彩色刷り物「和蘭陀船之図」、「新興の横浜」ほか 八点(神奈川区六角橋加山昇市氏)

(2) 関東大震災関係新聞 二八〇点(港北区錦ヶ丘 今井清一氏)

(3) 書籍『浅野統一郎』ほか 四点(千葉県柏市)

葉県柏市 鈴木孝一氏)
(4) ヤマハ製オルガンほか 二点(港北区仲手原 佐藤隆氏)

嵐正利氏)

町 渡部繁雄氏)
(18) 横浜角力常設館チラシほか 一三点
(東京都江戸川区 関根八郎氏)

(8) 中区南吉田町郵便局長手塚家資料
(西区霞が丘 手塚尚氏)
(9) 上原專祿震災日記 (京都府宇治市上原弘江氏)

▼出版物

(1) 「横浜居留地の諸相」価格二五〇〇円

(2) 「史料でたどる明治維新时期の横浜英仏駐屯軍」価格二五〇〇円

(5) 「ペリー提督日本遠征記」挿絵ほか
二点(鶴見区寺谷 板垣久史氏)
(6) 横浜実測図(明治一四年)、「大坂新報」(明治一三年一二月一日号)
二点(栄区上之町 鈴木義重氏)

嵐正利氏)
(20) 陸運会社 横浜港内外人馬車貨錢割
一点(新潟県柏崎市 吉田直太氏)

(18) 中区南吉田町郵便局長手塚家資料
(西区霞が丘 手塚尚氏)
(9) 上原專祿震災日記 (京都府宇治市上原弘江氏)

(21) 震災写真 三点(福島県会津若松市 笹内幸藏氏)
(22) 震災で被災した銅錢ほか 二点(南区南太田町 米山彦郎氏)

町 渡部繁雄氏)
(18) 横浜角力常設館チラシほか 一三点
(東京都江戸川区 関根八郎氏)

(8) 中区南吉田町郵便局長手塚家資料
(西区霞が丘 手塚尚氏)
(9) 上原專祿震災日記 (京都府宇治市上原弘江氏)

(23) 「横浜市經営に關する建議書」横浜商業會議所 一点(長野県辰野町 小野忠秋氏)
(24) 絵はがき「横浜大惨害の実況」ほか 九点(神奈川県二宮町 遠山恒夫氏)
(25) 震災関係資料 二三点(鶴見区北寺尾 水島章氏)
▼「関東大震災と横浜」展追加提供資料
企画展示「関東大震災と横浜」開催直前に北海道南西沖地震が発生し、大変多くの皆様が被災されました。横浜開港資料館では、七〇年前の関東大震災の時に横浜市民に全国から暖かい救濟が寄せられたことをあらめて感謝し、被災地への募金を呼び掛けました。おかげさまで、九月末日までに四八、三四一円の義捐金が寄せられました。皆様のお気持は、日本赤十字社神奈川県支部を通じて被災地あてにお送りいたしました。義捐金をお寄せ頂いた方々に御礼申し上げるとともに、被災地の皆様の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

▼今回の企画展示「関東大震災と横浜」には大変大きな反響があり、たくさんの方が来館され、熱心に展示を御覧になつっていました。資料の提供も多く、展示担当者は追加展示スペースを作り出すのに追われていました。この「資料館だより」も全ページを当てるこになり、「閲覧室から」は、休ませていただきました。

(7) 関東大震災関係写真帖ほか (川崎市川崎区 田口隆氏)

(15) 写本「漂民御覽之記」 一点(神奈川区二ツ谷 關根俊衛氏)
(16) 関東大震災被災写真、深川伊都麿肖像写真ほか 六点(東京都八王子市深川高明氏)
(17) 震災絵はがき 一点点(旭区上白根)

(1) 神奈川区青木町黒河内家震災関係資料 (東京都渋谷区 黒河内隆氏)
(2) 関東大震災関係写真 (中区本牧町中村豊氏)
(3) 岩本三郎撮影関東大震災関係写真 (神奈川県伊勢原市 岩本滋・すみ子氏)
(4) 関東大震災関係新聞 (神奈川区旭ヶ丘 斎藤秀夫氏)
(5) 中区不老町林家資料 (神奈川県葉山町 林保治郎氏)
(6) 中区蓬萊町小林家資料 (磯子区久木町 小林柱太郎氏)
(7) 関東大震災関係写真帖ほか (川崎市川崎区 田口隆氏)